

ウ、健全かな生涯教育の展開

2、「向こう三軒（KEN）両隣」精神文化の定着と共鳴社会の創造

地域自治振興会と行政がパートナーとして地域の課題に取り組みことは重要なことであり、加えて各地域の「近所」の方々が万が一の時に助け合う「近助」は地域に古くから伝わる「向こう三軒両隣」という精神文化によるものです。この精神文化の定着とお互いに顔が見える共鳴社会の創造に取り組んでいきます。

3、三位一体の行政

地域自治振興会（住民）、民間団体、行政が三位一体となって町の魅力づくり、住民の「繁栄、安全安心、幸福」という住民福祉向上に取り組めます。役場組織が住民の皆さまに開かれ、信頼され、最高のサービスが提供できるよう、日ごろの行政活動の中で住民の声を聞き、研鑽（けんさん）を重ねていきます。

第3 社交の場（たまり場）

新たな創造は常に「人と人、人と文化、人と自然」の出会いの中から誕生しています。

出会いは刺激であり、進化の源になっていきます。今年度完成する「複合交流施設」は町内外の若者男女が「集い、語り、学び、創り、楽しむ」新しい社交の場、たまり場、憩いの場であります。

ある著名な方が人間の成長にとつて「読書」「文化芸術」「遊び（スポーツを含む）」の3つの体験が重要であると指摘しています。この複合交流施設は中心市街地の核となるもので、時には受動的に、時には自らの意志で能動的に使うことができる施設、生きる力を育む前述の3つの体験ができる施設でもあります。東川らしさを表現したシンボリックな役割を果たすもので、教育委員会とも連携し、専門的な視点から「語」「学」「創」を集い、楽しむことができるように努めます。

1、本と暮らす生涯学習
近年の読書離れは著しく、本を手にとつて読まない世代が増えていると聞きます。「三つ子の魂百まで」という言葉がありますが、読書をする習慣を早い時期から身に付けることが大切であると考えられています。複合交流施設に子どもコーナーを配置し、親子

町内の学校で留學生が学んでいることで、まちなかでの消費純増、雇用機会の確保、生産性向上（アルバイト従事）、さらには次のような独自施策の財源にも大きく貢献しています。

- ア、高齢者生活支援（タクシーチケット、住宅改修、医療費支援など）
イ、子育て環境充実（保育料軽減、福祉給付、予防接種など）
ウ、教育文化スポーツ振興（国際化教育、地場家具活用など）

第5 東川振興公社等と連携した新たな学び体験観光などの展開

1、新しい体験型観光の展開
東川振興公社、観光協会などと連携し、新たな体験観光の視点から「親子で日本語学習と日本文化、スポーツ体験」「冬を生かした滞在体験」などの展開に取り組んでいます。特に東川振興公社が中心となり海外の東川事務所及び地元

のクラブ作家などと連携し、モデル的な事業として東川暮らし体験館、キトウシケビンなどを活用して体験型滞在（ハブ機能）が積極的に展開されるように支援します（台

等で読書に親しむ習慣づくりの場としての活用を進めます。地域の人々の自主的な発想と実行力の輪で読書習慣が定着化するように住民団体へ委託し、参加を求めます。

2、文化、自然資源の掘り起こしと文化財指定など

複合交流施設は「大雪山文化、家具デザイン文化、写真文化」を中心とした大切な文化資料を保存し、伝承する施設としての機能も有しています。今年度は北海道と命名されて150年目を迎えることから、本町に存在する宝物を掘り起こし、文化財などに指定し、次世代へしっかりと引き継ぐことができよう努めます。また宝物を広く町内外の人々へ紹介します。

3、文化資源を活用した町のPR

80年以上も前に書かれた「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎著）がマンガ化され、若者の間で大変人気となり、感動を呼んでいることがテレビ等で紹介されています。現在、体験できないことや新たなものへ挑戦することが若者の心（士気）を高めているものと推測しています。

湾、中国、タイなど）。

2、食文化などの体験推進

留學生から学ぶことが多くあります。アジアの米輸出国であっても東川米に対する評価が非常に高いことです。日本の米文化などを発展著しいアジアの国々などの人々に対して提供することにより、年々減少する米消費を海外の人々の新たな消費などによって食い止めることは可能と考えています。日本とアジア米作地帯と間において草の根レベルでの交流が少なかったことから、価格のみで評価比較されてきましたが、日本の食文化を体験することにより、日本食への関心も相当高くなつてきています。「寿司づくり」「おにぎり」など米食文化と併せて「味噌づくり」「漬物づくり」などを通じて、食材の消費拡大と未来へ向かって食文化の輸出にも取り組めます。

3、海外事務所での試行的な販売

アジア各地の東川事務所と連携し、東川町でつくられているもの（家具、クラフト、マンガ本、写真など）を試行的に販売し、輸出の可能性に

本町にも素晴らしい文化資源があり、児童文学者で直木賞作家の故戸川幸夫氏の著書「牙物語」、映画監督菅原浩志氏の映画「写真甲子園0.5秒の夏」などは道徳教育の視点からも若者の間で読んで、見て、感動してほしいものです。本町に関係する素晴らしい教育文化を「写真、マンガ、絵本など」の媒体を通じて全国や世界に発信することが、東川町の知名度向上と交流人口の拡大、そして次代を担う若者の健全育成に繋がると考えています。天人峡温泉地区の羽衣の滝への園路修復記念も兼ねて取り組みます。

第4 学園環境のある町の価値創造

人口8千人程度の小さな町に私立北工学園、道立の東川高等学校、東川養護学校があることは町の大きな価値であります。少子化が進行する中で、地方に学校があることの価値を住民とともに共有し、賢明な知恵を出し、魅力的で若者に選択される学校づくりの支援を継続します。

1、北工学園、東川高校との連携

ついて調査を行います。

第6 健全な財政運営

「健全な財政運営」は「堅実な歳入確保」がベースとなります。「賢明な地域内経済循環」の展開を通じて財源を確保し、さまざまな独自施策を展開してきています。少子高齢化社会の到来の中で、新たな行政要望は高まっており、きめ細かなサービスの提供には恒久的な財源確保が求められています。特に「ふるさと納税」制度を活用するため、特命担当を設置するなど歳入確保に努めます。

- 1、文化資源活用宣伝等による交流人口拡大
2、東川振興公社、北工学園と連携し、安定した学生の受け入れ推進と移住者確保
3、ふるさと納税「ひがしかわ株主」の確保

第7 おわりに

任期最後の年度であります。が、「元氣」と「士気」は失わず、職員の「チーム力」、そして関係機関団体の「結束力」、皆さまとの「連携力」を生かした町づくりを進化させたいと考えています。15年間の町長経験の中で学び体験したことは「世界の中の日本

北工学園は今年4月から経営が一新され、新たな地域に根差した学園としての運営がなされます。この学園は国が推進している1億総活躍時代の実現には不可欠な保育士、介護職など専門職人材育成の学校です。町及び町立日本語学校、東川振興公社が十分に連携し、活力ある学校づくりを支援します。また地元東川高校との連携充実にも引き続き取り組めます。

2、留學生等支援のための連携

まちなかに常に300人ほどの留學生が滞在し、年間の延べ宿泊数は8万泊を超えています。滞在者は学生であると同時に消費者でもあり、より東川らしいサービスの提供により消費力は向上するものと考えています。商工会などとも連携し、サービスの向上に努めます。また留學生等が自国の知人や家族などに対して発信する観光、生活、食文化情報も未来に向かって大きな役割を果たすものと考えています。

留學生に対する日本語や日本文化体験に多くの住民がかかることができるよう文化団体、読書支援団体、近隣の

であり、世界の中の東川である」であります。「百聞は一見に如（し）かず」という言葉がありますが、日本国内、世界の中から見て東川町は発展する余白が無限にある素晴らしい町だと考えています。余白は宝の山であり、この山を宝の持ち腐れとしないように知恵を出し、住民福祉向上を目指して実行することが不可欠であります。先人が残された素晴らしい世界に開かれた「写真の町」に関する条例に敬意を表したいと思います。

地方自治の原点であります。住民福祉のより一層の向上に尽力してまいりますので、議会及び住民の皆さまのご理解とご支援を重ねてお願い申し上げます。

なお今回の記述は町の価値を向上させる視点で記載しております。総合的な福祉施策の各項目は別添をご参照ください。

ありがとうございます。

平成30年3月8日

東川町長 松岡市郎



留學生のみそづくり（昨年12月13日、文化芸術交流センターで）